

八 新設・災害・復興

高等学校令により

高等学校設置

日本の国は、資格もまだいちおう間に合う中の一条件の時代なので、高校卒の資格も与えられる機関をと思い、三十二年度から広島県可部女子高等学校を新設の予定で、三十一年度よりその準備に取りかかった。

当時の高校設置基準として、まず校地が五千坪以上、校舎は生徒一人当たり一・五坪、それに設置学科に必要な機械器具（すなわち校具・教具）、校舎は普通教室・特別教室とそれぞれ生徒数に応じたもの、校地購入費は別として校舎の設計図（青写真）、図書および諸設備のリスト、見積書、それに必要な資金の証明になるもの（すなわちそれだけの金額を積み立てたものの銀行預金証明書）、校則、教授陣容、新設二年後までの経理予算書等を添付して、認可申請書を提出することになっていた。

まず土地を見つけるのに大わらわであった。元町長の山田保氏に依頼して、現在の可部町字中島に当時の台帳面積六千二百坪余（実測面積にすれば約七千坪）、坪単価は当時約八百円のところを壱千円で、山田保氏・森本堪太郎氏・木村茂氏のお世話で購入することに決定した。

三十一年八月調印し手付けを打ち、十一月末までには代金を全額支払い、登記も終えた。それと同時に、前記の高等学校設置認可基準による校舎その他必要なものを整えて提出したのが、三十一年末だった。申請書類には校地代金は別として、県の指示により右の諸施設・設備費として必要な「一、金参千九百九拾六万五千円也」の金額を地方の

銀行に預金して、その銀行の残高証明書を添付して提出したのである。

同年に尾道高校も新発足の準備をしておられた。西部と東部であるが、よく県庁で出会っていた。

明けて三十二年二月二十日付で高等学校設置認可が下りた。そのときの喜びもまた、ひとと一入であった。と同時に、充実した教育をして武田学園独得なものを発揮しよう。すなわち、女性の天賦の特性を生かした教育こそ本校の特色であると、改めて思った。

三十二年四月からの開設なのであるが、それまでには新校地に新校舎を建築してその校舎で出発するまでには至らなかった。ひとまず女子専門学校の校舎を使用することにした。当時女専の二年生が四学級あったが、その中から高校二年への編入制を県で認めてもらい、編入試験の結果、一学級だけ高校二年生を置くことにした。その生徒たちには女専において足りなかった単位を高校二年間で補うことにして、高校は二年生一学級、一年生二学級で出発したのである。

教員は、教頭に峯元藤吉氏を採用した。この峯元藤吉氏は広島文理科大学文学部の哲学を専攻され、郷里鹿児島県の公立高校に勤務されていた方であるが、学友の広大の金子教授の紹介により来校願ったのである。峯元氏には教頭役とともに高等師範の専攻学科である国語科担当、宮本昂氏（数学・体育）、小田正彦氏（理科）、福井敏枝氏（食物）、躍場久吉氏（社会）、養護教諭に市川八重子氏、音楽、書道、被服、染色、手芸等の担当は、既設の女子専門学校の教員が担当することにしたので教諭陣も揃った。

開校式

三十二年（一九五七）四月八日午前十時より、広島県可部女子高等学校の開校式を、新入生一年一〇三名、二年生三十七名（女専より編入）の計一四〇名、教員十三名をもって、感激の中でおそ厳かに執り行った。女専の新入生九十一名の入学式も同時に行った。新学期の授業始めは四月九日であった。

だが、生徒は二階の廊下から扉を飛び越えて、直に非常階段から下におろした。

こうして、全員の生徒を無事避難させることが出来た。

火は見る見るうちに校舎全体に廻り、百七十坪の校舎は一時間二十分で全焼した。幸い風が西風であり、西側には民家はなく田んぼであったため、他に類焼せず、その一棟の校舎が焼失しただけですんだ。

私のカリエスもそのときはまだ十分回復していなかったのであるが、日常から火災についての消火避難訓練の組織は出来ていて、たびたび訓練をしていたので、避難はもちろん、重要書類や校具・教具の搬出も一部分ではあるが手順よく出来たが、消火には全然手がつけられなかった。それは火元が天井裏であったことと、それに風速十メートル以上の強風で火の廻りが早く、全然素人の手には及ばなかったので、消防隊にお頼りするよりほかなかったからだ。こんなときには、消防隊が来て下さるのが実に待ち遠しくいらした。可部町の消防隊に続いて、次々と近郷の消防隊が目覚ましい活躍をして下さった。これによって御近所の民家や校舎の二棟も被害なく、出火した校舎一棟だけで難のがれられた。

なお、生徒や教職員に一人の死傷者もなく、全員無事避難できたことは、不幸中の幸いであった。

焼けた校舎の裏に、十六坪の宿直用の小さい家があった。そこには宿直代わりをしている私の荷物が入っていたのだが、校舎が鎮火した後で、その家が全焼していたことに気がついた。ここに置いてあった私の衣類・家具等の焼失はものの数ではないのだが、私の宝である紀元二千六百年記念の賞勳局よりの勲章、文部大臣からの教育功労表彰の勲章、教員免許状等、なお私物ではあるが、標本にしていた日本刺繍入りの衝立・床軸・額・大中小の袱紗等、そして長男夫婦の結婚衣裳といった記念の物もあった。ところが、有り難いことに、生徒の佐々木イチ子さんが仏様だけは出してきていたことは、何ともいえないほど嬉しく、また有り難く感謝した。仏様まで焼いていたら、私の心の

痛みも一入深ひとしほかつたと思う。

今一つ辛かつたことは、火元の教室の隣の中二階の室に、古市の旧校舎から引き上げてきた寄宿舎生十八名の者の荷物を入れていたのが全焼したことである。これは気がつかなかったのではないが、火元のすぐ隣であつたので、どうすることも出来なかつたのである。生徒たちが声をあげて泣いた。私も一緒に泣きながら、ごめん、ごめんの言葉の連続であつた。

出火の原因は、漏電より外に考えられないのであるが、電気会社で警察と一緒に一週間もかけて調べられたが、漏電とはどうしても認めてくれなかつた。火災保険に入っていないなかつたことも大きなミスである。世間知らずであつたとはいえ、建物を可部町から譲り受けたとき、何も気がつかないままであつたことを、強く反省している。

私の九年間の闘病生活も終わりを告げようとした時点で、またこうした災難に遭遇したことは、私の重ねての試練であつた。

授業再開

色々と苦勞して、ようやく高等学校発足に至り、大きな喜びと希望を持って開校式をやつと済ましたばかりのところであつた。ところが、大火に遭い、大切な校舎や高校発足に当たつて調達した校具・教具・図書も空しく消え、元の一に戻つてしまつた。私は、自分の不運を痛く感じた。

しかし、ここで悔やんだり悲しんだりしてはいかぬ。復興、復興だ。まず授業再開が一番だ。翌日の五月一日のみ授業を停止して、焼け残つた平屋二棟の校舎で、平常通りの授業を開始したのである。

お礼廻り

出火して御迷惑をかけた陳謝とお世話になつたお礼のため、近所はもとより各消防署、警察署、県庁等へご挨拶廻りをした。どこでもいたく同情と励ましのお言葉をいただき、感激の涙にくれた。

そのお礼廻りをするにあたり、本校の女子の先生方から、私の物が全部焼けて身につけるものが無いことに心を碎

かれ、我々がお見舞いとして一揃い作りますと御親切なお言葉をいただいた。私はその真心のこもった温かい御心だけ頂戴して固く断り、焼けた中から取り出して縫い直して着用して行くことにし、先生方のそのお見舞いは学校の復興の方へ廻していただくようお願いした。

後片付け作業

とにかく、このように高等学校新設早々大火に遭ったことは、私はもとより学園にとつても大きな

と復興準備

なショックであった。落胆していただだけでは生徒たちはもちろん、父兄に対しても相済まないの

で、さっそく学園復興に取りかかった。

まず残材の整理である。黒こげの柱が校舎の形をしたままで残っているのを、教職員や父兄のお手伝いで倒した。当時、父兄の一人に土井武俊さんという大工職の方がおられて、その方が先頭に立って主な柱に鋸を入れ、ロープをつけて引張り、倒してしまわれた。

私はその光景に、可愛い我が子が奪われたような悲しい辛い想いで胸が一杯になり、涙がとどめなく流れて、まともにその黒こげになった柱を見ることが出来ず、よそへ向いて立ち尽くしていた。そのとき、私の側に立って見ていた生徒の黒田郁子さんも、「先生！」と言ってしゃくり上げて泣いた。あのときの自分の姿、心境は、永遠に忘れることは出来ないであろう。こうした残材の片付けから、焼けた校具・教具の整理に取りかかったが、理科の機器・マシン・調理実習用具・標本等、焦げて憐れな跡形は今でも私の目から消え去らないのである。

火災跡の整理をするとともに、失ったものを再び求めて授業に支障のないようにしなければならぬので、その計画に取りかかった。そして焼失した校具・教具を調達するために、復興資金作りの計画を立てて実施に着手した。

この復興資金作りには、教職員も生徒も一生懸命になって下さった。しかし、寄付だけは、生徒父兄からはいただかないことにした。それは、本校発足時からの私の強い決意である。放課後、日曜を利用して男子の教員は、映画会

を各中学校を廻って行く、生徒たちは、田植・麦刈・仕立物等をして、その報酬をクラス単位で目標を定めて積み立てるなど、各々懸命に努力していただいた。

また、昭和二十七年から常石で鉄工所を経営していた長男からの援助、さらには神原秀夫理事から多額の復興資金の寄付、また親戚一統からの見舞いなどによって、校具・教具の調達と古市寄宿舎からの十八名の舎生の焼失した品物の弁償等、短日時に復興できた。授業は休講することなく進めることができた。

再び病床 二十三年から九年間、病床の中での学校経営をしていてやっと離床できたばかりのところへ、こうしに臥した

た災難に遭って大きなショックを受けた関係か、または復興のためにあれよこれよと今まで以上に気をつかった関係か分からないが、また臥床の身となった。以前と同様に、教員室に夜・昼ともベットを置き、その上の学校経営である。もう九年以上もこの生活なので、自分にとっては余り苦しいことでもなかったが、思うときに思う所へ出歩き、色々折衝の出来ないことが苦痛であった。

たとえば、県庁や私学振興会に出向いて、色々と相談したり依頼などがしたくてもそれがかなわず、手紙なり、また電話などによるわけで、それがなかなか会って話すように徹底したことになるのに不都合を感じていた。